

若越郷土研究

11の1

橋本左内の洋学観

三 上 一 夫

橋本左内が、わが国の近代的發展過程のなかに於て果たした開明的役割は、幾多の幕末志士のなかにあつて確かに精彩を放つて

いる。
かのハリスの単身来日には、「外国人ながら実に感服の至り」とし、いたずらに彼を夷狄視するものこそ、「迂人・俗客」のたぐいだと、当時の外国人夷狄視の一般風潮を厳しく批判しているが、このような進歩性に富んだ近代的意識は、一面彼の優れた洋学的識見に裏うちされているとみるべきであろう。

とにかく、左内の洋学勉学の熱意のほどは、極めて高く評価すべきであろうが、次に彼が洋学に対して一体何を意図したか、

三上 橋本左内の洋学観

また洋学の振興によつてどんな成果を期待したかにつき、若干考察したい。

左内の洋学研究は、いうまでもなく蘭方医学からはじまつたといえるが、大阪の緒方洪庵の適々齋塾における二年余りの勉学は、洪庵をして「他日わが塾名を掲げん。池中の蛟竜である」と賞讃させるほどに成果を収めさせている。このような彼の真剣な勉学に対しては、嘉永二年（一八四九年）藩主より遣使褒賞され、藩手当金まで給与され、その俊才のほどは、ようやく藩首脳部にまで認められるようになった。

さらに安政元年（一八五四年）には江戸に遊学、坪井信良の門に入り、杉田成卿、戸塚静海に蘭学を学ぶが、ここに於て蘭方医学のみならず、物理、化学、兵学などの分野、さらには日米和親条約締結直後の緊張したなかにあつて、外交問題など世界情勢への政治的関心を深めていつたのである。安政二年（一八五五年）再度上府してからは、一段と蘭学の広汎な分野にわたり研鑽をすゝめたほか、英語、ドイツ語にも相当な熱意を示したもようである。

ところで安政三年（一八五六年）七月十七日明道館講究師に補せられ蘭学掛を兼ね、

翌四年一月十四日明道館学監心得となり同藩校を担つて立つにいたつたが、その業績として極めて注目すべきは、同四年（一八五七年）四月十二日学制改革の一環として館中に洋書習学所を設置したことである。

彼がヨーロッパ諸国の学術、自然科学、武技等が精巧を極め、到底わが国の及ぶところでないことを卒直に認め、「兵法、器械術、物産、水利、耕織」等の諸技術を積極的に導入するためには、まず第一に洋学の勉学が先決だとする考え方は、ここに当然成立つわけである。

ところが、さらに一歩進んでヨーロッパの政治制度についても、かなりの関心と識見を持つており、その開明的感覚は明らかに蘭学をはじめとする洋学の研究により導き出されたものとして注目すべきである。

左内が安政二・三年ごろ著したとされる「西洋事情書」によると、ヨーロッパの民主的政治機構や社会、教育制度などについて、かなりの認識を持つていたことがうかがわれる。

それによると最近ヨーロッパ各国は「専

ら政教を修め、人民を撫育し、その法度紀律整肅懇到」で、国王はわずか十余人の供という身軽な恰好で民間を巡遊するが、そのさい特別に行在所は設けずに気軽に民家に止宿して民情を調べる。租税も二十分の一をとるくらいで、その負担は甚だ軽く、しかもこれを、「国王一身の宮・口腹居所のために費やさず、主に救荒饗災之手当に致し、国王居所などは至極手軽なる趣」で、館の周囲はおよそ二町ぐらゐのもの、詰めている警備兵も二十名足らずとの由、どこから面会を求めてきても直ちに応対するという気軽さである。

またヨーロッパ諸国の政体の趣意が、天帝の意を奉ずることにあつて、上下とも衆情にもとづき、公儀にそむかぬことが第一で、役人の選考に当つては、第一に国内の衆論に基づき、賢明才学の者を挙用することとし、たとえ国王の一族でも不賢なるものは政治に参与できない。そのため国王として「一人にて吾意に任せ、恣に大事を作すこと能わず」とし、専制的な独裁政治が許されぬことを強調している。

一方、天文・地理・測量・算術・究理・分析・医科・交易など「実用の学」を主と

する学校教育制度が整つており、また女子が刺繡・機織などから手習・読書まで学べる学校もある位で、学校教育が殊更に行届いているとしている。

この「西洋事情書」は、たしかに彼がヨーロッパ諸国の政治制度をどの程度理解したかを端的に示すものであり、また当時のわが国の封建的な幕藩政権の実態との明確な相違点をはつきり意識したうえで記述であるとも思考されよう。それとともに如何にも幕末における近代思想の開拓者らしい一面を持つてゐるかにみえる。

さらに彼は、外国貿易が藩財政に大きな利益を与えるものと考え、「当今外国貿易盛に相開候折柄に於ては、国家御大政中の最も御専務と相成候御事と」（安政四年五月頃、制産に関する建議手書）し、そのために、まず第一に「制産」（生産）を大いに振興し、しかも製品を「程能く売捌候事、肝要之義」（安政三、四年頃、外国貿易説）と強調、さらに「右諸品物を以て外国と取引相始候事、誠に国家に於て大なる御利益」（同説）があると論じ、商館についても、長崎、箱館など、さらには広東、ワシントン（「話聖東府」）にまで設けるのが

得策だと訴えている。

また外国商人の風儀は、「本朝商人の狡弄嗜慾」なものと異り、「商法専ら信義に基き礼律を守候事」故、これをよく見習わねばならぬとし、遠くロシア、イギリス、オランダなどにも人を遣し、その実情を調べらる。

なおかかる航海について、諸大名が願出れば、なるべく許可を与えるようにと建築している。（安政四年十二月二十七日、幕府諮問に対する松平慶永答申）

左内の積極的な貿易論の展開には、云うまでもなく彼の優れた洋学的見識によつて支えられているが、一方、ヨーロッパ諸国が大いに學術技芸にすぐれ「兵学を始め、器械を製し、物産を開くの術、及度学・算術等迄、頗る実験を究め、且其精巧なる事」は、わが国の到底及ばぬところであると卒直に認め、しかも「その學術、技芸を講究候事、最急務なるべき儀に付、……」と論じている。（明道館に関する諸布令）たしかに彼はヨーロッパ近代文明を高く評価しているようであるが、しかしここにその思考の封建的限界が厳然と存在するのを見通すことはできない。

鎮と為り、復た遂に郡県二相成る。本朝之郡県変じて封建と為り、兵農分れて兩トなり候類、実ニ今より如何ともすべからざる之勢ニ御座候と同様の事ニ御座候。」(安政三年四月二十六日、中根雪江あて左内書翰)と強調、「世代の推移、時勢之沿革」は「知らず覺へず右之如く推移り候者ニて、既ニ推移り候上ニてハ聖人も如何んトも成され難き御事に候」と訴え、政治はあくまで時勢の流れに従うべきであつて、前代ものを急激に改めることはおよそ不可能で、たゞ前代の弊害を改めることが精一杯だとした。

その点、わが国はヨーロッパと違い、「革命と申す乱習悪風之無き事故」とする明確な革命否定論に立脚しているといえよう。

かくて洋学のなかの近代政治思想が幕藩政権を否定する革命的イデオロギーであることを明確に意識したからこそ、洋学の倫理的、政治的思想の分野には厳しい警戒的態度をとり、むしろ儒教精神の強固な裏付けによつて、かなり揺いできた封建機構の現支配体制を強化するためにこそ、洋学のなかの技術学の積極的導入に真剣な熱意を

みせようとしたとみるべきである。

一方、左内と藩主松平慶永との緊密な連りは云うまでもないが、彼としてはむしろ藩主の權威を背景とすることにより、その政治的、学問的活動が可能であつたわけである。

彼がその優れた洋学的識見により、ヨーロッパ近代政治や思想について少からず理解し、その開明的、進歩的な意義を認めながらも、封建権力や封建社会に対する眞の批判者とはなり得ずして、むしろ現実の幕府政治に集権的封建国家の擁護者としての道を歩む結果となつた。

そのため左内の開明的進歩性を余りに過大評価することは妥当ではなく、彼の高度の洋学的識見といえども、あくまで儒教的イデオロギーに支えられ、それを基盤としていた事を見通すわけにはいかない。

何としても彼が福井藩士という士分階級に属し、しかもその政治生活が同藩最上層のなかに宮まれ、藩主慶永の絶大な信頼をうけ、手厚い保護のもとに封建身分が保証されていた以上、封建機構のワク内での開明性という限界から脱却することができなかつたのはむしろ当然だともいえる。

註(1) 安政四年十月二十一日村田氏寿あて左内書翰

(2) 大阪遊学中に笠原良策と書信の往復をしきりに行つたが、その書簡のなかに「原書(蘭書)の読解力進歩に対する称讃の辞は敢て当らず」とし「漸く先日より文法書を終業致し、この頃昆斯(病理論)相始め候。独見にて腹稿致し候上にて講釈を相頼み候。誠に眩暈に堪えず候。御一笑下さる可く候」(嘉永四年七月八日笠原良策あて左内書翰)と洋学勉学に対する熱意と謙虚な態度がみられる。

(3) 左内の俊才のほどは、半井仲庵をして「実に英才目を拭ひ驚くべき後進の領袖」(安政元年三月十五日笠原良策あて半井書翰)と絶讃させている。

(4) 安政三年二月十九日市川斎宮あて杉田成卿書翰には、「同人(左内)より借り居り候英辞書……」とあり、また安政四年十二月二十六日左内あて本多修理書翰には、左内が革学に対して真剣な熱学熱をみせたことを記してある。

また安政五年十二月二十五日中根雪江あて書翰には、左内がドイツ語をオランダ語風に音読したことを記している。

- (5) 安政四年四月十二日 学問所事件につ
いての布令原案(第一則)
- (6) 右記布令原案には「彼の長ずる所を知
り候には、其学芸・伎術を講究候事最も
急務たるべく、義に付、……」とし洋学
習学所設立の趣旨を明記している。
- (7) 左内の「西洋事情書」の内容は、西
周、津田真道、加藤弘之、神田孝平など
洋学者の思想的、政治的分野における啓
蒙的役割にも比せられるものがある。
- (8) 安政四年五月頃 制産に関する建議手
書
- (9) 安政四年十二月二十七日 米国との外
交一件につき幕府の諮問に対する松平慶
永の答申書
- (10) 洋学に対しても熱意をみせた佐久間象
山も「東洋道德西洋芸」と説き封建道徳
の根幹たる儒教精神を賞揚しているが、
左内の場合と相濟するものがある。
- (11) 安政三年四月二十六日 中根雪江あて
左内書翰